Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-04

カミュの『ペスト』とコロナ

松田，浩則

(Citation)
海港都市研究,16:71-74

(Issue Date)
2021-03-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012832

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012832

カミュの『ペスト』とコロナ

松田 浩則

(Hironori, Matsuda)

どのような名詞にも原則として男性と女性の区別をつけるフランス語でコロナビールス(coronavirus)は男性名詞である。これは virus が男性名詞だからであり、この点に関しては議論の余地はない。ところがコービッド 19 (Covid-19)に関しては意見が分かれている。この語は周知のように coronavirus disease 2019 に由来する「頭字語」(acronyme)なので、これをフランス語で表現しようと思えば、disease がフランス語の「病気」を示す女性名詞 maladie に対応するということから、本来ならアカデミー・フランセーズが推奨しているように、女性定冠詞をつけて la Covid-19 としなければならないはずなのだが、実際には圧倒的に le Covid-19 という男性定冠詞を付けた言い方が主流である。フランスを代表するとされる『Le Monde』や『Le Figaro』といった新聞でも、今日現在（2021 年 2 月）の紙面では le Covid-19 と表記している。la Covid-19 と「正しい」フランス語を使用しているのはごく一部の医療関係者に限られているように思われる。コロナ以上とはいわないまでも、コロナの性別をめぐる議論もまたフランスでは「収束・終息」していない。

そんな議論が持ち上がりつつあった 2020 年 3 月、フランスの週刊誌『ル・ポワン』は新型コロナウイルスの蔓延とともにフランスとイタリアでアルベール・カミュの『ペスト』（1947）の売り上げが急増していることを伝えていた。そして同年 4 月、新潮社は『ペスト』の日本語訳（宮崎嶺雄訳、初版は 1969 年）を 2 月以降 15 万 4 千部増刷したばかりでなく、その累計発行部数が 100 万部に達したこともあわせて発表した。日本の出版不況はすでに長期におよんでいるが、外国語文学の翻訳物はとりわけ低調で、たとえばフランス文学の翻訳に関して言えば、初版が 1000 部というのもざらである。それでも在庫がはけないほどである。さらに最近では、翻訳者の印税放棄を条件に翻訳を依頼してくる出版社まで出てきている。そうした状況のなかで、新潮社による 15 万 4 千部の増刷という数字は途方もないものに思われる。というのもカミュの『ペスト』は決して読みやすい小説ではなく、学生たちが研究発表で取り扱うと、おそらくフランス統治下のアルジェリアにたいする理解が決定的に不足しているためか、かなり的外れと思われる意見が頻出するものだが、この作品の何がそこまで多くの人を引きつけているのだろうか。よく言われているように、『ペスト』に描かれた世界が「コロナ禍」（なんとまあ使いがっての悪い日本語よ！）の現在を先取りしているということだろうか。

3 月 12 日にパリにいた私はマクロン大統領がテレビで１回目の緊急事態宣言を予告する演説をホテルで聞いていたが、15 日に帰国し、16 日の彼の 2 度目の演説は自宅待機の状態で聞くことになった。どちらの演説もこの若い大統領特有の歯切れのいい明確なものであったが、2 つの演説の間にちょっとした言葉遣いの違いが感じられた。彼は、「平時」では決して行わないようなレストランや教育機関の閉鎖を命じたことを通告するとともに、罰則規定をともなう禁止項目を近日中に設ける予定であることを明言しつつ、医療従事者にさらなる負荷をかけることのないよう個々人の責任感と連帯感に強く訴えた。大統領のみごとなまでに構築された演説自体はフランスの政治家たちが採用する演説のためのプロトコルに則ったもので、さほど驚くには値しないのであるが、この日の演説は戦争の比喩を多用したことで注目を浴びた。演説を全文確認してみると、大統領は「私たちは戦争状態（戦時）にあります」という表現を 6 回も使っている。たとえば、「私たちは戦争状態にあります、それは衛生面の戦争です。たしかに、私たちはある軍隊やよその国と戦っているわけではありません。しかし敵はそこにいるのです。目には見えず、捕らえることもできませんが進撃しているのです。それと戦うためには私たちの総動員が要求されます」という具合である。もちろんコロナとの戦いを実際の戦争に喩えることほど陳腐なことはないにしても、この 42 歳の若き政治家が演じてみせた「戦う大統領」のレトリックは、カミュが『ペスト』のエピグラフとして引用したダニエル・デフォーの一節、「ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは、何であれ実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同じくらいに、理にかなったことである」が提起している、もうひとつ別の、おそらくより精妙なレトリックを私に想起せずにはおかなかった。つまり、『ペスト』で描かれるアルジェリアの港湾都市オランの人々が置かれた監禁状態は「他のある種の」監禁状態の寓意でありメタファーでもあるということである。もちろんデフォーを引用したカミュの意図は明白で、1940 年 6 月から 1944 年 8 月までフランスを占領したナチス・ドイツ軍をペストに見立てる一方で、ペストと勇猛果敢に戦ったオランの人々をフランスのレジスタンに見立てることも可能だということなのであろう。それはフランスのテクスト理論の観点からすれば極めて不本意なまでに稚拙な小説の読み方には違いないが、カミュ自身そうした方向で読まれることを期待していた節がある。たとえば、小説の最終第５章で描かれるペストからの解放の場面で、カミュはドイツ軍からパリが解放された時にさかんに使われた単語 libération を連続的に使っている。さらに、パリ解放直後から始まっていたドイツ軍への協力者コラボにたいする粛清を念頭に、主要登場人物の一人タルーを「犠牲者たちさえも時には死刑執行人たることを知っていた」人

物と描出している。つまり、ペストと戦ったオランはナチス・ドイツと戦ったパリであり、フランスなのである。そしてそのことと深く関わっているのだろうか、エドワード・W・サイードが『文化と帝国主義』などで指摘しているように、『ペスト』の主要登場人物たち（それば かりか『異邦人』のそれもまた）はほとんどすべてフランス人風の名前を持つ人物であり、アルジェリア人、ひいてはアラブ人と想定できる人物はすべて後景に追いやられている。またオランの街中に置かれている彫刻も民衆を率いるマリアンヌ像であったり、ジャンヌ・ダルク像であったりと、フランスを象徴し、フランスの国威発揚を目的としたものばかりである。あたかも、フランスのどこかの要塞都市でペストとの攻防戦が行われているような趣である。そうした物語のなかでも極めつけは、オランのオペラ座での一場面であろう。そこで演じられるのは、ペストのために町の外に出られなくなってしまった一座による『オルフェイオスとエウリディケ』であった。ところがある日の上演の最中、地獄に墜ちた妻を助けにきたオルフェイオス役の歌手が舞台上でペストを発症し、そのまま急死して、「関節の自由を失った道化役者の扮装をしたペスト」と化した姿を観客の前にさらす。こうして、カミュは地獄からの救出を願っている観客の前で救世主の死を見せつける。それはヨーロッパ芸術の粋ともいうべきオペラを通して行われた、ヨーロッパ文明にたいする死の宣告であり、出口なしの状況の表現であったのかもしれない。いずれにせよ、このギリシア悲劇の構造を模倣したといわれるユートピア小説あるいはディストピア小説からは奇妙なことにアルジェリアが消えている。ということは、オランはカミュ自身が小説冒頭近くで書いているように「一個の中性の場所」に過ぎなかったのだろうか。

ここでこの小説の発表当時、アルジェリアがフランスの植民地であったことを喚起しつつ、さらにもう一度、小説の読みの可能性を確認してみよう。アルジェリアの独立戦争は『ペスト』が刊行されて 7 年後の 1954 年ごろに始まったと言われている。つまり、アルジェリアの人たちの立場に立てば（といっても、その利害関係は入り組んでいて一筋縄ではいかない）、『ペスト』に描かれたオランの人々は後年栄誉に包まれることになるレジスタンス運動に身を投じた人たちの寓意などではなく、植民者であり、ピエ・ノワールであり、侵略者フランスそのものだったとも考えられる。それどころか、彼らのペストとの闘いは、その後顕在化するアルジェリア人たちの独立運動を弾圧したフランス軍などの暴力のメタファーとして読まれる可能性もあるということである。もちろん自らがレジスタンス運動の闘士だったカミュが、自らの輝かしい経歴を貶めるような小説を書いたとは考えづらいが、可能性はつねに開かれている。そしてフランスが統治するアルジェリアおよびその独立運動にたいするカミュ自身の「両義的」な態度ゆえに一義的な読みにはよりいっそう警

戒する必要がありそうである。まさにカミュの『異邦人』に対抗して書かれたというアルジェリア出身の作家カメル・ダーウド（Kamel Daoud, 1970－　）の『もうひとつの『異邦人』　ムルソー再捜査』（*Meursault, contre-enquête*, 2014）のように、近いうちにもうひとつの『ペスト』が書かれ、アルジェリア性の不在とその復権の可能性が問われる日が来るかもしれない。また、この点に関しては、日本語の翻訳がいっさいないのが残念でならないが、バンジャマン・ストラ（Benjamin Stora, 1950－　）のような歴史家によるアルジェリア戦争やマグレブに関する研究書（*Une mémoire algérienne*, Robert Laffont, 2020 など）がおおいに参考になるにちがいない。アルジェリア戦争は今なおホットな問題で、アルジェリア国内では最近頻繁に自らのアイデンティティーをめぐってフランスにたいする抗議の声が上がっているが、こうした問題の解決と二国間の融和を求めてマクロン大統領が「考察の使命」（mission de réflexion）を委託したのがストラそのひとであった。

ちなみに 2020 年はナチス・ドイツ軍によるフランス占領の 80 周年にあたっていた。帰国前に駆け足で訪れたコロネル大通りのパリ解放博物館では「1940 年、集団避難したパリジャンたち」という特別展が開かれていた。当時のフランスの大混乱ぶりを伝える貴重な資料が展示されている館内に、レジスタンスを率いたジャン・ムーランや後年アルジェリアの独立に合意することになるド・ゴールの声が響き渡っていた。